

|| 編 || 集 || 後 || 記 ||

記録的な猛暑と言われた夏もいつの間にか終わり、冬になりましたが、この原稿を書いているクリスマス間近の現在、例年より雪が少ないようです。猛暑の影響なのでしょう。

さて、旭川医科大学研究フォーラム第11巻をお届けします。本号では原著である投稿論文がなかったものの、依頼論文が4編、「独創性のある生命科学研究」報告が31編、JICAの研修報告が2編、エッセイ、学界の動向、学生のページ、本学教員執筆書籍紹介、談話室、旭川医科大学回顧資料など盛りだくさんの内容になっています。また、昨年度、看護学講座岩本純教授、救急医学講座郷一知教授、小児科学講座藤枝憲二教授が逝去されました。先生方のご研究の業績を講座の先生にご執筆頂きました。大変お忙しい中、ご執筆下さった皆様にお礼申し上げます。

昨年発行の本誌編集後記にも書きましたが、編集委員会では多くの皆様からの論文のご投稿をお待ちしています。投稿論文は査読済み論文となります。よろしくごお願い申し上げます。

(H.H)

表紙解説

太陽は、怖い。昔から太陽を仰ぎ見るとき、眩しさの向こうに、その燃えさかる様と途方もない熱さを感じてきました。地球から太陽まで光で8.3分かかると言われます。1億5,000万km。その中心温度は、 15.7×10^6 Kであり、表面はおよそ6,000 K。日常生活の中で実感できる熱さが、せいぜい都市ガスの炎:2000度弱であることを思うと、異常な高温に怖れを感じます。

燃料は水素であり、中心核において熱核融合によってエネルギーが取り出される。太陽の半径は約70万kmあり、地球の約110倍。内側から、中心核、放射層、対流層、光球、彩層、コロナより構成される。光球より上層の光透過性の高い部分を太陽大気と呼ぶ。プラズマ化した太陽大気上層部は太陽重力による束縛が弱いため、惑星間空間に漏れ出している。海王星軌道まで及ぶこれを太陽風と呼び、オーロラの原因ともなっている。(Wikipedia参照)

普段何気なく、身に受けている太陽の日差しの加減は、地球上の生物にとって絶妙です。また、太陽からの距離、水が固体・液体・気体として存在できること、大気存在できる程よい重力……。途轍もない数の偶然の果てに、私たちの命があることを思うとき、太陽に対する想いが畏怖ばかりでなく、畏敬の念にも変わってくるのです。そのような想いを抱きながら、太陽を見つめていると、コロナをまとった講座名群が互いに熱核融合反応を起こしながら、放射されていく様が眩しく目に飛び込んでくるのです。

整形外科学講座 今井 充